



Title	Disparity of Cervical Cancer Risk in Young Japanese Women: Bipolarized Status of HPV Vaccination and Cancer Screening
Author(s)	谷口, 茉利子
Citation	大阪大学, 2021, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/85286
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

Synopsis of Thesis

氏 名 Name	谷口茉莉子
論文題名 Title	Disparity of Cervical Cancer Risk in Young Japanese Women: Bipolarized Status of HPV Vaccination and Cancer Screening (HPVワクチン接種状況による子宮頸がんリスクと検診受診行動の違い)
論文内容の要旨 〔目的(Purpose)〕 日本において1994年から1997年の間に生まれた女性はヒトパピローマウイルス (HPV) のワクチン接種率が高く、子宮頸がん検診の対象年齢となりつつある。本研究では、HPVワクチンを接種した女性と非接種の女性を対象に、現在の子宮頸がん検診受診行動、健康意識、子宮頸がんに関する知識、子宮頸がん検診の受診意向を評価し、HPVワクチン接種状況の違いに応じた効果的な受診勧奨方法を確立することを目的とする。 〔方法ならびに成績(Methods/Results)〕 20歳と21歳のHPVワクチン接種者と非接種者のがん検診受診率を日本のいわき市で調査したところ、ワクチン接種者群では6.2%、非接種者群では3.1%でワクチン接種者群は非接種者群よりも有意に高いことがわかりました ($p<0.01$)。次に、インタビューやインターネット調査により、ワクチン接種者は非接種者よりも健康意識が高いという傾向が明らかになり、非接種者では、がんになることへの不安が子宮頸がん検診の受診意向を有意に高めることがわかりました。最後に、前方視的研究として枚方市で通年子宮頸がん検診再勧奨時に案内を送る時に従来通りの案内と接種状況の違いに応じたリーフレットを送る群とで無作為化割り付けを行い、読んだ後のワクチン接種者群と非接種者群のがん検診受診率を調査した。がん検診受診率はワクチン接種状況の違いに応じたリーフレットを用いた群で接種者も非接種者も上昇はしたが、統計的には有意ではなかった。 〔総括(Conclusion)〕 子宮頸がんに関する知識・意識・行動はワクチン接種者の方が非接種者よりも高い傾向にあることが示唆された。HPVワクチンの接種状況に応じてがん検診受診勧奨を行うことで子宮頸がん対策を推進できる可能性がある。	

論文審査の結果の要旨及び担当者

(申請者氏名) 谷口 茉莉子	
論文審査担当者	(職) 氏 名 主 査 大阪大学教授 木村 正 副 査 大阪大学教授 土岐 祐一郎 副 査 大阪大学教授 磯 博康
	論文審査の結果の要旨
	本研究は、HPVワクチンを接種した女性と非接種の女性を対象に、子宮頸がん検診受診行動、健康意識、子宮頸がんに関する知識、検診の受診意向を評価した初めての研究となる。 20歳と21歳のHPVワクチン接種者と非接種者のがん検診受診率をいわき市で調査したところ、ワクチン接種者群は非接種者群よりも有意に高かった。次に、インタビューやインターネット調査により、ワクチン接種者は非接種者よりも健康意識が高いという傾向が明らかになり、非接種者では、がん罹患の不安が子宮頸がん検診の受診意向を有意に高めた。 枚方市で通年子宮頸がん検診再勧奨時に案内を送る時に従来通りの案内と接種状況の違いに応じたリーフレットを送る群とで無作為化割り付けを行い、読んだ後の両群でのがん検診受診率を調査した。がん検診受診率はリーフレットを用いた群で接種者も非接種も上昇はしたが、統計的には有意ではなかった。 HPVワクチンの接種状況に応じてがん検診受診勧奨を行うことで子宮頸がん対策を推進できる可能性がある。 実際の現場での応用を目指した研究内容は学位に値するものと認める。